

## 眼と虫

陽光を反射して放埒に輝く青田の風景も、ひとたび日没すれば一切は闇の中である。しばらくは仕事を終えて田から帰る住人たちの影が往来を行き交っていたが、家々の窓から夕餉の香りが立ち昇る頃にはそれも途絶えた。食器のぶつかる音、人間たちの会話、テレビの騒音が軒先にこぼれる。繋がれた犬が湿った鳴き声を数回あげたが、飼い主に残飯を与えられると夢中で食り食らい、体を丸めてすぐに深い眠りに落ちた。冴え冴えとした月が現れ、何度か雲に隠れてはまた顔を出した。もはや人家に光はなかった。往来を歩く者もない。暗がりの中から昆虫が歌い、百姓は早朝からの労働に備えて昏々と眠る。

住宅地から田へと向かう道の途中に、飲料を売る自動販売機が設置されている。農家の老人たちは仕事に疲れると、よくここで冷たい茶やコーヒーを買い、脇の草むらに腰を下ろして甘露露と啜るのである。人間たちが活動をやめた今、自動販売機は闇の中で燦然と青白い光を放つばかりである。その周囲を無数の光の粉が漂っている。羽虫である。自動販売機の光を全身に浴びて、それらは小さな体を明滅させながら、土臭い夜風にもまれている。羽虫は蛍光灯の上を這い、透明なガラスの上を這い、ボタンの上を這い回る。そうして最も近い距離で光を浴びてい

てもなお飽き足らず、ふいに勢いよく飛び立つと、新たな光をめぐって体ごと突っ込んでいき、他愛もなく弾き返されている。

自動販売機の正面、そのほぼ中央に、羽虫と比べると途方もなく巨大なものが貼り付いている。粘着質な薄い皮膜に覆われた丸い胴体は周囲に生えている草と同じ色で、突き出した二粒の眼に乱舞する羽虫が映じている。石くれのように気配を消した彼の視界を羽虫が横切ると、その口から細長い糸のようなものが吐き出される。羽虫は他愛もなくそれに絡めとられ、数瞬後には彼の腹の中に呑み込まれている。一連の行為にかすかな音もなく、仕草を終えた彼は平然と凝固している。仲間が一匹消え失せたことに気づいた羽虫はいない。それどころかますます彼の周りに集まってきて、大胆なものはその背中にとまったりする。それから数分の間に、彼は同じようにして五匹を食べた。

周囲の田はますます暗さを増す。昆虫たちの鳴き声が奔流となって夜空をめぐる。彼はゆっくりと手足を動かし、光のほうへ歩を進めた。そちらには数匹の羽虫が活動していた。外敵への警戒を忘れ、光に夢中になっているそれらを、彼の舌はいとも簡単に捕らえた。ずば抜けた体躯をもつ大蚊すら食べた。どれだけ食べても羽虫が減化する心配はなかった。雑木林から、稲の隙間から、民家の庭から、溝の水面から、確固として佇む巨大な光を目掛けて、羽虫はとめどなく押し寄せてくる。羽虫は狂

つたように光に体をぶつけていく。彼が大胆に四肢を動かして近づいても避けようときえししない。まばゆいものの前では恐るべきものなどなくなってしまうかのようである。光に炙られ、ちぎれんばかりに羽を震わせて駆け回るそれらを、彼はためらいもなく胃の中に落とし込んでいく。

彼の視界から一時的に動くものの姿が消えた。周囲の羽虫を食い尽くしてしまつたのである。少し移動すればいくらでも羽虫はいたが、彼は静かに中空を眺めている。少し待てば再び食料の充実してくることを彼は経験から学んでいる。暗黒の雲の切れ間に、自動販売機の光とは比較にならないほど微かな輝きを放つ星が並んでいる。それを映した彼の目玉粒はさながら天球のようである。微動だにせず、夜空に眼を向け、鼓膜に音を集めている彼の腹の中で、溶けきらない羽虫がしきりに胃壁を引っかいている。彼はまったく意に介する様子もなく、ただ星にばかり目をやっている。新たな羽虫が一匹彼の視界を横切つたが、彼はそれを食ふことすら忘れてしまつたようである。星々は彼方で輝いている。

彼は首を傾け、羽虫たちが群がっている方を眺める。そちらには一際強い人工的な光が漲っている。時おり明滅する、暖かな、ガラス越しの光にまみれて、羽虫たちは酔っぱらつたように踊る。光源と見れば見境なく突つ込む。力尽きたものは土に散らばつて

いる。舌を飛ばせば届く距離で光と戯れている羽虫もいたが、彼は首を傾けたまま、無表情にそれを見ている。羽虫の前にあつて彼の顔は巨大である。胃の中の羽虫の動きはもう止まつている。彼の喉元が突然びくりと震えた。むき出しの鼓膜が、猛然たる勢いで近づいてくる何ものかの気配をとらえたのである。彼は一瞬体を縮めると、勢いよく伸びあがつて闇の中へと跳躍した。着地する音は昆虫たちの歌に紛れた。自動販売機は凝然と立ちくしている。奔放な光の粉がそれに絡みついていく。

了